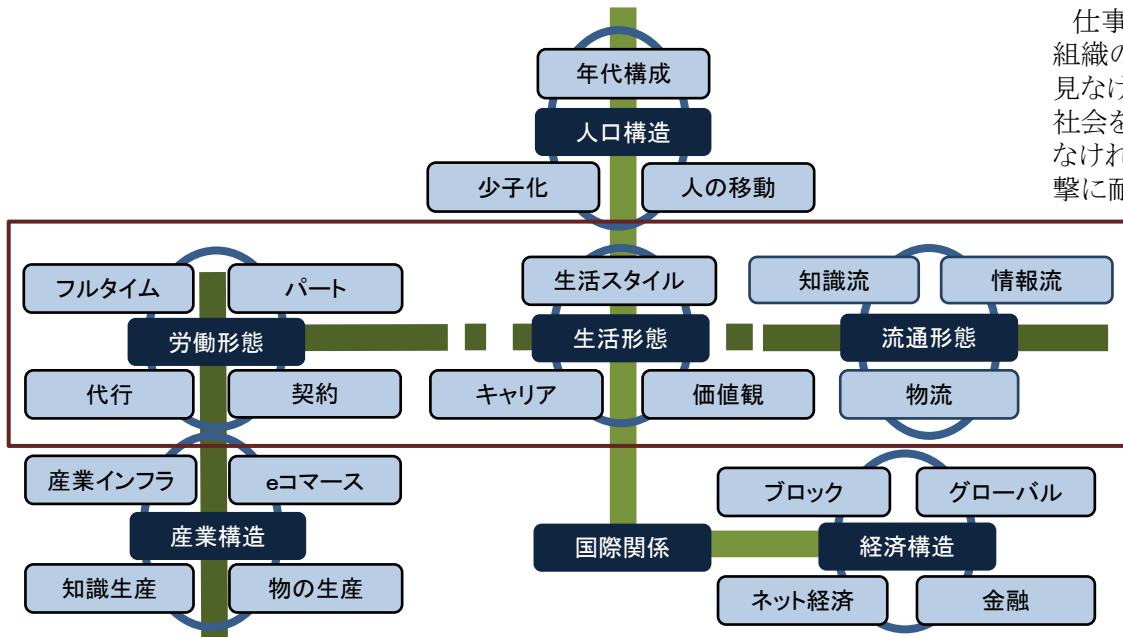


社会を見る七つの対象



仕事を進めていくには、周りを見なければならない。仲間たちや組織の中だけを見ていると井の中の蛙になってしまう。組織の外を見なければならない。市場を見て、市場外市場を見て、社会を見る。社会を見る大きな目的は、変化の知覚である。変化に適応していかなければ、市場から取り残されてしまう。社会変化からの市場の衝撃に耐えられなくなってしまうかもしれない。



「生活形態」「流通形態」「労働形態」の変化は、市場にもっと敏感に影響する。日々、観察していても時間の無駄にはならない。一瞬にして変化するのは、「流通形態」であり、生活スタイルに強く影響する。

左にあげた7つの項目は、連動しているが、特に、「生活形態」「流通形態」「労働形態」は連動し、変化しやすい。社会全体の生活形態が変化するには年数がかかるが、一部の変動は激しい。労働形態は経済状況に応じて変化し、組織の生産性に影響される。

社会変化を確認するために、観察定点を設けておく。それが上に挙げた7つである。人口構造は、少子高齢化が随分と言われている。世界で見れば、増え続けていて、アジアの人口は世界の半分以上を占める。都市に人口が集中して、生活形態、労働形態に影響を与えている。

グローバル時代になっている。金、知識、情報の移動は世界中を一瞬で駆け巡る。物流も24時間あれば、たいていが世界中のどこにでも行く。流通形態は、考え方と技術、インフラで随分と変化した。流通形態が産業構造、経済構造を変化させている。国際関係は、当然の如く、10年前とは感覚が違っている。情報流通が個々の生活価値観に影響を及ぼしている。

近代経済学が、一国の経済理論、経済施策を支えられなくなった。社会実態と発展に即した新たな経済論が求められているが、未だに見いだされていない。政治形態にも影響を与えている。

世界では紛争がいたるところで起こっており、問題が多くなってくるとポピュリズムが勢いづいてくる。一国単位で考えられていた経済と政治が、ブロック、グローバルでとらえられなくなってきた。ビジネスも同様以上に重要になっている。金融は、実経済の何十倍の速さで動いている。

社会は、社会を維持するためにたくさんの機能をもっている。維持していかなければならない機能があり、新しく入れ替わっていく機能がある。新たな機能が生まれてくる。社会が市場を構成する材料を持つ。社会のどこかが変われば、市場が変化し、産業と経済を変える。

組織が成熟し、成長限度が見えてくれば、労働形態が影響される。生活基準、形態を組織が規定する。

社会の観察は、市場視点に影響する。昔は市場はイチバからの延長であったが、集合として市場が考えられるのは一部になった。市場が実態でも、概念上でも拡散している。消費する場所、機会、方法が市場と直結する。複数の市場が重なり合う。7つの視点対象が、市場構成ヒントになる。

ドラッカー著『イノベーションと起業家精神』に、こう述べられている。予期せぬこと、ギャップ、ニーズ、構造の変化、人口の変化、認識の変化、新知識の獲得、これら七つの機会のすべてを分析することが必要である。油断なく気を配るだけでは十分でない。分析を体系的に行なわなければならない。機会を体系的に探さなければならない。